“使途を明確に設定する”寄付者が応援したいテーマを選択できる使途指定型の募金事業

学校法人中村産業学園

【九州産業大学テーマ募金】

中村産業学園では、２０１５年度（平成27年度）から寄付募集の体制を整備するなど募金活動を強化してきました。その中で２０２０年度（令和２年度）に、「教育・研究環境整備充実募金」を改め、「九州産業大学テーマ募金」（以下、「テーマ募金」）を開始しました。

従来の募金活動には大きく二つの課題がありました。

一つ目は、寄付金の使途が明確でなかったことです。これまでの「教育・研究環境整備充実募金」は、教育・研究という大きな枠組みの中で寄付を募っていたため、使途に具体性が欠け、寄付者から自らの寄付がどのように役立っているのか分かりにくいという声が多くありました。

二つ目は、寄付の対象事業に偏りがあったことです。従来の募金活動では、事業ごとに趣意書を作成し、それぞれ寄付を募っていました。その結果、寄付者の関心が周年事業などの目立つ事業に移り、通常の「教育・研究環境整備充実募金」への寄付が減少するという事態となりました。例えば、60周年事業の一環であった体育館の建て替え事業において実施した「大楠アリーナの建設特別募金」（２０１８年に募金開始）では多くの寄付が集まりましたが、一方で、通常の募金にはほとんど寄付が集まりませんでした。

そこで、募金担当者が寄付募集に関するセミナー等に参加し、寄付募集に関する知識を深め、また、近隣大学からも情報収集を行うなどして、寄付者の関心が特定の事業に偏らないよう、「テーマ募金」という形で、複数の事業（テーマ）をまとめて寄付者に提示しました。また、複数の事業（テーマ）から寄付先を指定できることから、寄付者自身が寄付事業を具体的に選択することができ、寄付への動機づけにもつながっています。

「テーマ募金」の過去３年間の実績として、２０２０年度は、募金総額６千２百万円、２０２１年度は、募金総額１億４千８百万円、２０２３年度は、募金総額２億１千万円となっており、年々金額が増加しています。これには、「テーマ募金」を中心とした近年の募金活動の成果が表れています。

「テーマ募金」のテーマ及び各テーマにおける取組み内容は、毎年検討され、学内の「募金推進委員会」に諮り決定しています。テーマについては今後も大幅な変更は見込んでいませんが、各テーマにおける取組みの内容については、ニーズに合わせて毎年、若干変更しています。２０２３年現在は、教育・研究活動支援等に関する13のテーマを設定しています。

２０２２年度実績において、「テーマ募金」の使途で最も多い分野は教育分野になっており、18％を占めています。取組み内容としては、グローバル人材育成のための英語力強化プログラムの推進、国際社会の最前線で活躍する学生を育成するグローバル・リーダーシップ・プログラムの推進等があげられます。

次に多い使途は学生生活分野になっており、10％を占めています。取組み内容としては、給付型奨学金制度の充実、コロナ禍による社会環境の変化を踏まえた一人ひとりに寄り添った学生支援等があげられます。

最近では郵送物にも工夫を凝らしており、例えば、テーマ募金の趣意書を発送する際の鑑文については、寄付の依頼半分、記念品（毎年変更しているもの）の写真半分で掲載するなど、寄付意欲を向上させるような構成を心がけています。さらに、昨年度から毎年記念品を変更しており、新たな動機付けにつなげようと考えています。

テーマ募金ポスター
（通年用）

【活動報告書について】

寄付がどのように使われているのかを具体的に明示した「活動報告書」にも工夫を凝らしています。感謝の気持ちを寄付者に届けるだけではなく、寄付者によって学生支援にどのように役立っているのかなどに関心を持ってもらうことで、さらなる寄付につなげていくことも大切にしています。

まず、表紙には「感謝」という文字を大きく載せています。寄付者に対し感謝の気持ちを率直に伝えるとともに、寄付者の目を引くようなインパクトがあるデザインにしています。また、表紙の色合いも温かみのある色を選ぶなど、感謝の気持ちをより表現できるように工夫しています。加えて、活動報告書に掲載されている内容には、グラフや写真を用いることで視覚的に表現し、さらに「学生の声」を掲載することで伝わりやすいようにしています。

また、寄付者ご芳名や寄付者からのメッセージが掲載されており、寄付の証が目に見えるようになっています。これにより、自身が同法人を支える一員になっていることを認識できます。

テーマ募金活動報告書も
親しみやすく工夫

【大楠アリーナ２０２０】

「大楠アリーナ２０２０」は同法人のシンボルである楠（くすのき）の形からデザインした美しい梁や柱が特徴的な新体育館です。60周年事業としてこの新体育館建設のための「建設特別募金」を実施しました。法人では、この募金を開始するため、寄付に特化した新たな部所である経営基盤強化担当を立ち上げました。これは積極的な企業訪問へつながっています。

募集期間中、個人、法人・団体１口以上の寄付をした人には、「大楠アリーナ２０２０」館内にご芳名を刻銘しました。「大楠アリーナ２０２０」の外壁はガラス張りであるため、建物の外側からも銘板の存在が確認できます。この銘板は、２０２０年８月に設置されました。

60周年事業の「建設特別募金」が終了した現在は、「テーマ募金」に１人５万円以上寄付した場合（リピーターとなり寄付の累計が５万円以上となる場合を含む）、「大楠アリーナ２０２０」３階の観覧席１，０００席に先着順で芳名プレートを設置する寄付の顕彰を行っています。募集期間は、２０２２年４月１日から満席になるまでとしています。対象は、個人の寄付者のみです。１年目は60名が芳名しており、今年度（２０２３年度）は現時点（２０２３年12月）ですでに60名以上が累計５万円以上の寄付を行っているため、昨年度より件数、金額ともに増加する見込みです。本プレートは希望により、家族等の氏名を記名することも可能です。

通常、寄付は卒業生からの問い合わせが多い傾向にありますが、この「テーマ募金」には在学生の保護者からも問い合わせがあります。子どもが在学した記念に名前を銘板に刻みたいというのがその理由です。そのため、卒業生だけではなく、保護者からの寄付も集まっています。

今後は、寄付者に対し芳名プレートを直接見てもらう企画を計画しています。

【九産大古本募金について】

２０２０年度には「九産大古本募金」を開始しました。読み終えた本の買取金額が法人の「教育活動資金」として寄付され、学生の教育支援につながっています。令和４年度の実績では、80万円の寄付が集まりました。

金銭での寄付にためらいを感じたとしても、本であれば寄付をしたいという人が協力してくれます。また、古本募金をきっかけに「寄付」自体に関心を持ち、「テーマ募金」など他の募金事業に寄付する人が増えるなど副次的な効果もあります。

「九産大古本募金」は広く一般に募集していますが、協力する人の多くは学内の教職員です。教職員の研究室や各事務室を担当者が訪れて古本を回収することで、コミュニケーションが生まれるとともに、学内での寄付に対する意識づけにもつながっています。

古本募金や自動販売機利用募金、遺贈等も紹介